

二次元ぷち文庫

# 淫虜姫

囚われのエルフ

小説：  
斐芝嘉和

表紙イラスト：  
舞猫ルル

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『淫虜姫 囚われのエルフ』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



# 淫虜姫

囚われのエルフ

斐芝嘉和

表紙／舞猫ルル

二次元ぷち文庫

# 登場人物紹介

Characters

---

## メリル

偉大なるツアトル神の末裔たる森の民・エルフ。その一族たるルーカ族の姫君。気高く正義感が強い。

ナラやブナ、カシの老木が、絡まるように生い茂った古い森。

その外縁近く、雨季には浅い沼地となる草原の端で――。

(なんて、非道い……)

灌木の茂みに細い身体を沈めたメルルは、猫のような瞳を吊り上げ、薄青い入れ墨で妖しく彩られた頬をほのかに紅潮させて、込み上げてくる怒りを懸命に噛み殺していた。

細い背をふんわりと包み込んだ金色の髪、鹿のするように尖った耳、薔薇の紅さと野苺の瑞々しさを併せ持つ唇――鞆革なめがわの袖なしチュニツクから伸びる細腕は、象牙のように白い。伸びやかな脚を深く折り曲げているせいで、柔らかな禪でキツチリと締め上げられた小振りな美尻が短いスカートからはみ出している。

硝子細工のように華奢な手には、縁に美しいレリーフの施された短弓があつた。森の民と呼ばれるエルフが、子供のころから使い慣れている武器だ。

火を噴くような視線の先には、鬼族の戦士たちがいた。

醜い疣で覆われた厳つい顔、猿のように突き出た顎、死人にも似た灰緑色の肌――どこまでが肩なのか分からないほどの猪首で、胴は樽のように丸く、短い脚はガニ股だ。その代わりに太い腕は異様に長く、手は大きい。

メルルたちエルフにとつて、鬼族は天敵だった。猿のように身軽で熊のように強く、飢えた狼よりも凶暴で人間よりも執念深い。好色な彼らは美しいエルフに目がなく、たびた

び森に侵入しては若い娘を略奪していく。

いま、メルルの目の前にいる鬼は、全部で十二匹。傍にいたメルルの仲間の倍だ。一斉射で倒せないのだから、応援を呼ぶべき状況なのだが——メルルは背の簾えびらから矢を二本抜き、一本を指に挟んだままもう一本を弦につがえて、キリキリと引き絞った。

——チチチ、チキキ。

ハシリネズミの鳴き声に似た音が、傍の茂みから湧く。仲間のエルフが「なにをする気だ」と訊いてきたのだ。

『決まっているでしょう？ あのコを助けるのよ！』

一番大柄な鬼の胸元に狙いを定めたまま、メルルは口の中で舌を丸め、チチ、チキチキ、と小さな音を立てた。獣の鳴き真似で意思を伝えあう、狩人語。音楽的な才能に秀でたエルフでなければ使いこなせず、そして鹿のように尖ったエルフの耳でなければ聞き取れない、繊細で玄妙な話法だ。

メルルが「あのコ」と言ったのは、鬼たちの真ん中にいる、裸の少女のことだ。細いうなじに紅革の首輪をかけられ、うしろ手に縛られたその少女は、先ほどからコココ、コココ、とキツツキが木を叩くときのような音を発していた。

狩人語でどの獣の鳴き声を真似るかは、支族ごとに異なっている。少女のようにキツツキの音を真似るのは、西の森に棲むアルパ族だ。ハシリネズミの鳴き声と違って単音しか

用いないアルパ族の狩人語は、複雑な内容を伝えることは苦手だが、遠くまで届くので警報としては最適だ。鬼や人間には本物のキツツキと区別がつかないだろうが、メリルたちエルフの耳には「逃げて！」という悲痛な叫びとして響く。

『お待ちください、姫。いま、シユカを村へ走らせました。応援を待ちましょう』  
仲間の声に、メリルは小さく首を振った。

『あの鬼どもは、エルフ狩りをしているのよ。あの娘は囚。逃げて、逃げて、と叫んではいるけれど、あの声を聞いて本当に逃げるエルフなんてひとりもないでしょう？』

偉大なるツァトル神の末裔と自認している森の民は、ほかの種族よりも誇り高い。その気高さゆえに、本人がどんなに警告を発していようと、危機に陥っている仲間がいれば決して見捨てたりはしない。

『まして私は、ルーカの王の血族なのよ！』

本物のネズミより大きな音を立てて意思を伝えたと、傍の茂みの陰で仲間たちがハッと身じろぎした。囚われの少女にも、メリルの声が聞こえたらしい。涙に濡れた瞳を真ん丸に見開いて、それまで続いていた警報を思わず途切れさせる。

途端――。

「ゴラッ！ 怠げてんじゃねえっ！」

少女の首輪から垂れる鎖を握っていた鬼が、しなる鞭を振るって少女の尻を打った。



「きゃひいんッ！」

落ち葉に膝をつき、か弱く崩れ落ちる裸の少女。

だが、さすがにエルフというべきか——理不尽な暴力に屈したようなフリをして、ココ、ココ、と喉を震わせ、アルパ方言の狩人語で話しかけてくる。

『ルーカの姫様、なりません！ 私は大丈夫、早くほかのエルフへ、警告を……』

『大丈夫、いま助ける』

『なりません！ この鬼たちは——を——つています。早く、警告を……』

方言だから、ところどころに分からない語が混じる。あるいは少女が焦っているからか。どちらにしろ、メルルは耳を貸さなかった。

ルーカ族は最も古きエルフ族、あらゆる支族の源だ。そしてメルルは、ルーカ族の姫。由緒正しき血族の名を汚さぬため、ほかの支族の少女が非道い目に遭っているなら、己の命を投げ出してでも助けなければならぬ。

(……いいえ、血族の名は関係ない。私は怒っているのよ！)

囚われの少女は、メルルと同じくらいの歳頃に見えた。やや赤みがかった艶やかな金髪、ようやく膨らんだばかりのあどけない乳房、遠目にも柔らかそうな丸い尻、白く瑞々しい伸びやかな太腿——希望に胸を膨らませ、明るく微笑んでいるべき歳頃の乙女を、裸に剥いて首輪に繋ぎ、家畜のように引き回して鞭で打ち据えるとは。



とても許せない。

卑劣でおぞましい鬼族どもに、一刻の猶予も与えたくない。

『姫様、姫様……ッ!』

『安心して。弓の腕には自信があるの』

必死に叫んでいる少女に優しく話しかけたメリルは、瞼を閉じて精神を集中した。口の中で呪文を唱え、四肢に魔力を漲らせる。

体格で劣るエルフが鬼族と戦うためには、魔法を駆使しなければならない。呪文詠唱に時間がかかるという欠点があるが、いま唱えているような運動神経を高める魔法であれば、戦闘前に使用することができる。

（穢らわしい鬼族め……神聖なるエルフの森に足を踏み入れた罪、そして我が同胞を辱めた罪……決して赦さぬ! ツアトル神に代わって、私が罰をくれてやる!）

細い肩に流れ落ちているまっすぐな金色の髪が、メリルの怒りに煽られたようにふわつと揺れた。鞆革の袖なしチュニツクの下、控え目に膨らんだ乳房の奥で、小さな心臓が早鐘を打つ。

怖くないと言えばウソになる。だが、この手で少女を助けると誓った以上、なんとしてでもやり遂げなければならぬ——と。

『なりません、姫様……ああ、うしろ、うしろっ!』

びたん！

平手で尻を打たれたメルルは、ああ、と声を上げて震えた。

鬼たちの視線が柔肌を這う。淫具を挿し込まれて限界まで伸びきった尻穴や、先ほどまで弄り回されて紅く熟した秘裂が、舐めるように見つめられる。

（く、く……悔しいッ！ こんな下賤な鬼たちに、うう……くう……ッ！）

恥辱に唇を噛んでいると、尻のうしろに立った鬼が再び頬擦りしてきた。

「ふぁうっ!？」

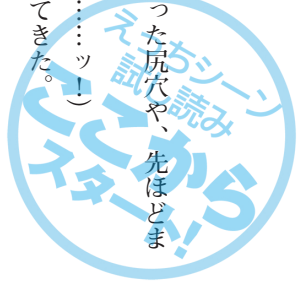
思わず溢れ出す、恥ずかしい吐息。

先ほどは痛くて気持ち悪いだけだった鬼族の疣が、桃色に染まった尻肌に気持ちいい。グリ、グリ、と擦りつけられるたび柔肉が揉まれ、甘く痺れて蕩けていく。

腸に棲みついた穢らわしい寄生蟲の淫毒によつて、全身の柔肌が性感帯になってしまったのだ——気づいた途端、身体中がそわそわし始める。微風に煽られている内腿がもどかしく、初夏の陽射しを浴びている背がむず痒い。

柔らかな二の腕が、敏感な腋が、控え目に膨らんだ形よい乳房が、その尖端の真っ赤な乳首が、ハの字に開いた太腿やスラリとした脛が——鬼に頬擦りされている尻に嫉妬し、はしたなく疼く。

「上等な練り絹のようにしっとりスベスベ、捏ね上げたパン生地のようにむっちりモチモ



チ。おまげに、ゴの芳しギオマ○ごの匂い……ごんな上玉、タダで犯らせられるガ！」

「なら、ぶっガゲはい格拉だ？」

「るーガの姫さんってだゲで、もうゴチゴチなんだ。姫さんの髪でしゴゲればいいだよ」  
「どんな上玉だって、どうせすぐ、ただの牝エルフになっちまうんだ。いまのうちにゴの気の強そうな顔をグチョグチョにしてやりてえなあ！」

言うなり、鬼たちがメリルの顔に殺到してきた。もはや我慢の限界らしい。

「ひ……ひいっ!？」

蒼褪めてもがくメリル、その、緩く縛られていた金髪が乱暴に解かれ、幾房にも取り分けられて、林立する男根に絡みつけられた。

背の低い鬼たちは、台に乗らなければメリルの口を犯せない。しかし、板状の首手枷にうなじを挟まれているメリルは、俯いた顔を起こすことができない。

その結果、自分の顔に切っ先を向けて雄々しく反り返った何本もの淫棒を、目の当たりにしてしまった。奇妙に捻れた亀頭の尖端、ハッキリとはしないものの恐ろしいほど太いカリ首。暗褐色の肉茎は木の根のように捻れ、生臭い粘液を滲ませてヌメヌメ輝き、フジツボのような肉疣をいくつも生やしている。

見るからにおぞましい鬼たちのペニスに、メリルのきらびやかな金髪がしつかりと巻きつけられ——厳つい指に握られて、ジョリ、ジョリ、としごかれ始めた。

鼻をくすぐる、青臭い匂い。

鬼どもの体臭や体液が、細くしなやかな髪を伝って身体に流れ込んでくるような、生理的な気持ち悪さ。

「や、やめろ……やめぬか、下郎ッ！ 私の髪を、髪を……そんなことに、使うなあ!!」嫌悪感に追い詰められたメルルは必死にもがき、板状の首手枷や腹を吊り上げた鎖をギシギシと軋ませた。だがもちろん、どんなに足掻いても無駄だ。

俯いて蒼褪めた顔のすぐ傍で、奇妙な形をした肉瘤たちがからかうように揺れる。艶やかな金髪を巻きつけた鬼の手指がおぞましい淫茎をしごくたび、尖端に透明な滴が膨らみ、煮詰めた草いきれのような匂いを放つ。

穢らしい、おぞましい、恐ろしい——しかし、胎内に湧き上がったのは嫌悪だけではなかった。ふわふわと立ち上る青臭さを嗅ぐと、腹の底が燃えるように熱くなり、頭の芯が痺れていく。胸がざわめき、口には唾液が溢れて、男を知らぬ膣穴がこらえきれないほどムズムズしてしまう。

食精蟲が餌を求めて、催淫液を分泌しているのだろう。

「うう……く、ううう……!!」

柔肌の感度がますます高まり、微風に撫でられただけでもゾクゾクツとなった。おぞましいはずの肉棒が、だんだん美味しそうに思えてくる。

（わ、私は、ルーガ族の姫……鬼どものいやらしい策略になど、負け……ない！）  
懸命に抗うメリルを嘲るように、

「あーあ、しょうガねえなあ。ぶつガゲだゲならタダにしといてやる」

尻のうしろに立っていた鬼が再び秘裂へ手を伸ばした。

「ふあっ!? あう、あああ、あああ、あああっ！」

ビラビラの縁を軽く撫でられただけで、割れ目全体に心地よい電流が湧き起こる。潤んだ粘膜をクチュクチュ鳴らされ、硬く痼った淫核を爪弾かれると、走り抜ける旋律に背筋が鋭く反り返った。

ほんのわずかな間に、淫毒が全身に行き渡ってしまったようだ。恥ずかしい場所を弄られているというのに、拒む気持ち弱い。いやらしい鬼の指がほんの少し動いただけで手足の先まで痺悦が走り抜け、頭の中が真っ白になり——桃色に染まった美尻が、牡を求める牝犬のように激しく左右に揺れてしまう。

（イヤ、イヤ……こんなの、イヤああっ！）

進りそうになった悲鳴が、溢れ出す喘ぎに掻き消された。

嫌悪に歪んでいた眉根が閃く悦びにふわっと開き、鼻先で揺れるいくつもの男根を熱く潤んだ瞳が無意識に追う。

——欲しい、アレが欲しい。

啞えたい、しゃぶりたい——膣でもいい、尻穴でもいい。

あの太くてたくましい肉棒を、あらゆる場所で感じたい——。

(ち……違うッ！ 私は、私は……あああッ!?)

込み上げてくる淫欲を慌てて打ち消そうとした、そのとき。

ビュクッ！ ビュククッ！

金色の髪を巻きつけた鬼たちの淫棒が、一斉に白濁液を噴いた。

「あうッ!? うぶッ！ ンうう……」

必死に顔を背けても、熱くて生臭い粘液のダマはメリルの額にベチャベチャと貼りつき、柔らかな頬を垂れて細い喉を穢す。

細い眉も、柔らかな瞼も、形よい鼻も、野苺のように紅くぷっくりとした唇も——たちまち精液に汚れ、青臭い滴を垂らし始める。鼻の穴にも粘ついて、ぬめり光る泡が膨らみ、やがてパチンと弾けた。

(け、穢らわ、しい……)

頭の隅で思っているのに、白濁液に濡れた頬がふわつと弛む。

震える唇が勝手に開き、涎を垂らす紅い舌が伸びて——鼻筋から垂れてきた生臭い滴を、掬うように舐め取った。

味蕾に染み広がる、苦しよっぱい味。

鼻腔に立ち込める、清冽なまでの精臭。

途端、これまで感じたことのない快美感が腹の奥底に爆発し――。

「あ、あは……あは、あえあああ……」

法悦の涙、鼻水、涎を垂らして、ビクンビクンと痙攣するメリル。

「ゲヘヘ、気位の高いるーガの姫さんガ、俺たちの精液を舐めてイギヤガったぞ！」

「ゴの分だと、すぐに自分ガ尻を振り始めるな」

鬼たちの嘲笑も、天上の調べのようにきらびやかに聞こえる。

餌にありつけた食精蟲が、一際強烈な催淫液を分泌してメリルを酔わせたのだ。

（ああ、ああ……イヤなのに、イヤなのに……気持ちイイ……蕩け、ちゃ、うう……）

大量の精液に汚れた頬に恍惚の笑みを浮かべ、眩いほど白い裸体をほんのり紅く火照らせて――獣のように繋がれたエルフの姫は、チョロチョロと小便を漏らし始めた。

\* \* \*

メリルの朝は早い。

東の空が白々とし始めるころ、

「オラ、朝だぞ姫さん。起きろ起きろ」

飼い主の鬼に無防備な尻をビタンビタンと平手打ちされ、浅い眠りから無理矢理引きずり出されてしまう。



しっとり汗ばんだエルフの姫の細い肩に頬を擦りつけ、男が唸るように言った。顔が赤らんでいるのは、熱い腸液に潤んだメリルの排泄器官にペニスをギュウ、ギュウと絞られ、気持ちよくなってきたから。

苾までみつしりと柔肉の詰まった豊満な乳房に、太い指を深々と沈め——グイッと抱き起こす。

「ふあ……ああっ！」

上半身を引き起こされたメリルは、胡座を掻いた男の脚に尻を落とし、角度の変わった淫棒に尻穴の奥底を改めて挟まれ、弾けるように反り返った。起き上がった背筋を稲光のような肛悦が駆け抜け、まるで肉槍の穂先に脳天まで刺し貫かれたような——。

こんな姿勢で犯されるのは、初めてだ。白熱した鋼のように熱くて硬い亀頭が子宮の裏側に到達し、ドクンドクンと力強く拍動して、存在をアピールする。

「あ、あ、ああああ……入って、る……お、お、オチンチンが、私の中に……こ、こんな奥、までえ……！」

「どうだ、気持ちイイか？」

猫撫で声で訊いた男が、サラサラと揺れる金髪を鼻で掻き分け、背骨が薄く浮き上がった肌理細かな柔肌に軽くキスした。

「やうンッ!!」

クリトリスに触れたときのような快感が弾け、ビクツと跳ねるメルル。

尻穴が窄まり、深々と潜り込んでいる男根のたくましい太さを再確認。上下の動きはわずかだったのに、猛々しい亀頭に直腸粘膜を挟まれ、しごかれ、裏側から揉まれた子宮にねっとりとした淫熱が湧き上がる。

「い、い……い、ですう！」

仰向いた頬を蕩けさせ、エルフの姫は細い身体を上下に揺らし始めた。鋼のように硬い淫棒に犯されていると言うより、性感帯と化した直腸粘膜をたくましい牡肉に擦りつけている、と言ったほうが正しい。

「イイ、イイ……お尻、いイイツ！ オチンチンにグポグポされて、お尻が、お尻が……

ああ、ああ、あああつ！ 蕩ける、蕩けちゃううっ!!」

思うより先に言葉が溢れ、甘えた響きに気づいて頬が赤らむ。

（ヤダ、私……なんていやらしい、声……ああでも、でもでも、でもお！）

尻穴だけでなく、胸も蕩け始めていた。

腋から回された男の両手はたくましく、摺り合わされた双球が芯まで揉み解されていく。鬼の手指に比べれば握力は弱い、その代わりに器用だ。鉤に曲げられた人差し指と伸ばした親指が胸先の乳首を挟み、

「ふひっ!? あひ……あひいつ！」

快感が痛みに変わる寸前までキュウ、キュウ、と捏ね潰される。

「よしよし、イイ声だ。どんな顔で鳴いているのか、見てみたいな」

「ゲヘヘ、そう言われると思っていましたよ」

笑った鬼が部屋の隅から、大きな鏡を運んできた。どこで拾ってきたモノか、大きな蜘蛛の巣のようなヒビが走っていて、男に背後から抱き締められたメリルの姿がみつともつつも映る。

だが、それで十分だ。

「うう……？ あ、ああ……ッ！」

恍惚に弛んだ己の顔に、羞恥の悲鳴を上げるメリル。

（これが、私……下賤な人間にお尻の穴を犯されて、私、私……なんて、気持ちよさそう  
な、顔……）

気高いエルフの姫を浅ましい家畜に堕した紅革の首輪、鼻環、耳タグ。

火照って蕩けた柔らかな頬、潤んだ瞳、紅く艶々としてわななきながら、涎混じりの吐息を漏らす形よい唇——細い肩や歪められた乳房、男の腰に尻を落としてM字に開いた伸びやかな脚などは、桃の花びらのように淡い紅色に染まっていた。透き通るほどに瑞々しい柔肌は香る汗を薄く滲ませ、湯上がりのようにしっとり輝いて見える。

背を駆け登る肛悦に合わせ、右へ左へくねる細いウエスト。ムチムチとした桃尻はさら

なる悦びを求め、石臼のように旋回している。

「いやらしい顔だ。そんなに尻が気持ちイイのか？」

男の顎が肩に乗せられ、頬を濡らす法悦の涙が舐め取られた。

「や……いやあ……言わないで、言わないでえ……！」

叫ぶ言葉には媚の響き。

逃れようとしてもがいてみても、奥底までねじ込まれた男根に性感帯と化した直腸を抉られ、いやらしく動く男の手指に乳房を揉まれ、乳首を抓られて、さらなる悦びに打ち抜かれるだけ。

「はうん……あううんッ！」

「なんと淫らな声だ。俺を睨み返したあの気の強さは、どこへ行った？ んん？ 誇り高きエルフの姫とはこの程度のものか？」

挑発されても、どうすることもできない。

グチュングチュンと抉られている尻穴が熱く蕩けて、甘く痺れきっていた。大きく左右に開いた伸びやかな脚はすでに感覚がなく——その代わりに、オアズケされた秘裂が狂おしく疼く。

（あ、あ……あああ……私の、オマ○コ……あんなに、紅い……）

普段はほかの柔肌と変わらない肉畝が、茹だったように赤らんでいた。羞じらうように

微かに開いた割れ目からは緋色の粘膜花卉がわずかにはみ出し、ヌメヌメ、ヌラヌラと、いやらしい粘液の輝きを放っている。

意識した途端、膣穴のもどかしさが爆発的に膨れあがった。

「お……お赦し、をお……！」

考えるより先に、鬼たちに躡けられた哀願の言葉が上擦った喘ぎとともに溢れ出す。

「オマ○コにも……オマ○コにも、お、お、お肉、棒をおおっ！」

「おいおい。エルフの姫がそんなはしたないことを言っているのか？」

「だ、だって……だってだって、だってええっ！」

耳元で嘲笑われたメルルは、恥辱に涙しながら己の両手を股間へ伸ばした。満たされない淫欲に追いついて、おかしくなっている。恥ずかしいことをしているという認識は微かにあるが、いけないことだとは思わない。

マシユマロのような柔肉に指を添え——パツクリと開く。

弾けるように飛びだしてくる、鮮紅色の粘膜花卉。

端を抓んで軽く引っ張り、クチュクチュとしごいて、

「奥が疼くの、疼いて疼いて……ヘンに、なっちゃううっ！ 挿入れて、突いて……いつもみたいに、滅茶苦茶にしてえ！ お願い、早く……早くううっ！」

肛悦に背を振りつつ、駄々っ子のように身体を揺すって、傍の鬼へ流し目を送る。

「どうした、挿入れてやらないのか？」

悶えるメリルを力強く突き上げながら、男が鬼に訊いた。疣つきペニスを得意げに揺らした鬼は、黄ばんだ歯を剥いて意地悪く笑う。

「家畜を甘やガしてはいけません。オマ○ごは御褒美として取っておガなげれば。それに、ゴの姫様は口でも感じられる変態ですガラ、ゴうしてしゃぶらせればいいんです」

メリルの傍らに踏み台を置き、異形の巨根を柔らかな頬に突きつける。

ほのかな精臭に誘われ、潤んだ目を向けたメリルは、

「ふぁ……あ……アモッ！」

自ら首を伸ばし、口を大きく開けて、パツクリと啜え込んだ。

口腔を埋め尽くす生臭い牡肉。

舌を圧し潰す熱い重み、味蕾に染み広がる甘辛い味。

（あ、はぁ……おちんちん、らぁ……！）

慣れ親しんだ感触にたちまち頬が弛み、目元に恍惚の涙が浮かんた。食精蟲はもういいのだから、精液を呑んでも絶頂は得られないのだが——尻穴をズンズン突かれ、豊満な乳房を力強く揉み捏ねられて、身も心も蕩けきっているから、そこまで頭が回らない。

「ソんん……ちゅっ！　むちゅっ！　ちゅっ！」

疣だらけの淫茎を柔らかな唇で締めつけ、王族の証の入れ墨が入った柔らかな頬を囲ま

せて、卑猥な音を立てながらしゃぶり始めるメリル。

牡肉に埋め尽くされた口の中でしなやかな舌を器用に動かし、裏筋に並ぶ肉疣をひとつひとつ舐める。ハッキリとしないカリ首を舌の縁でしごいてやり、奇妙に捻れた亀頭の尖端には舌の裏側のヌルヌルした部分を擦りつける。

「グふ、グふうううっ！ あ、あいかわらず、上手い……！ るーガ族の舌技は、病みつきになりますなあ！」

「そうか、それは楽しみだ」

メリルの耳裏を舐めながら、背後の男が笑った。

そろそろ限界が近いらしい。尻穴をグチュングチュンと突き上げている男根が、熱さを増し、硬さを増して、一際太くなってきた。剛直が上下するたび子宮が揉まれ——空っぽの膣穴が裏側から磨り潰される。

「ン、ん、んぷはあっ！ あモッ！ むちゅ、ちゅちゅちゅ……！」

高まる肛悦に目を細め、鬼のペニスを夢中で舐めしゃぶるメリル。丸みの頂点を厚い掌にしごかれ、乳首の先へ向けてギユウ、ギユウ、と絞られている乳房も気持ちいい。股間に這わせた両手は白魚のような細指を小刻みに震わせ、淫核と膣穴に弾けるような快感を刻み込んでいる。

（イイ……イイ、イイいッ！ オマ○コ、お尻……お口、オッパ、いいいッ！ 全部、全



部全部、気持ちイイ……痺れる、溶けちゃう、蕩けちゃううっ！

肉体だけではない。

理性も、誇りも、羞じらう気持ちも——。

鋼のように硬い男根に尻穴を挟まれるたび、熱い突風が背を駆け抜ける。

槍より鋭い快感が何度も何度も脳天を貫き、そのたびに顔をはね上げ身を振るメリル。

「ンえお……むちゅっ！　ンじゅちゅっ！」

口一杯に頬張った生臭い肉塊をレチョレチョ舐めれば、頭の芯が痺れていく。

クリトリスに発した電流が乳首の快感と混じりあい、肛悦とは別種の快美感になった。

男に舐められている耳朶もイイ。

フイゴのような鼻息を吹きかけられているうなじも、擦れあう乳房も、どうしようもなく気持ちイイ。

ほんのり赤らみしつとり汗ばんだ双球が、甘く痺れる。

尻穴を挟まれるたびビンビンして、力強く絞られるたび燃え上がり——。

「ぷ、ンぷ……ぷはああつ！　ああ、ああ、あああつ！　もうらめ、らめ、らめええ！  
れちやうれちやう、おっぱい、れちや、あ、あ……ああああ——ッ！！」

鬼のペニスを吐き出し、裏返った声で叫んだ、その瞬間。

——ぴゅッ！　ぴゅるる、ぷっしやあああああつ！

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**